このコーナーは、Airてっし（エフエムなよろ）との共同企画で、テーマを市長が設定し、本誌ではコラムとして、Airてっしではパーソナリティーとの対談で放送いたします。

「生薬のまちなよろ」の復活を目指して

名寄市に薬草の試験研究所があるのを皆さんはご存知ですか。「薬草試験場」の愛称で親しまれている当施設は、昭和３９年に旧厚生省北海道薬草試験所として名寄市大橋に開設以来、現在は「独立行政法人医療基盤研究所薬用植物資源研究センター北海道研究部」となり、北方系薬用植物の試験栽培研究の草分けとして、北日本随一の貴重な薬草の研究施設です。大学関係者や医薬品メーカーをはじめ、医療関係者が日本全国から視察研修に訪れますが、こうした施設が名寄にあることは実は大変貴重な財産なのです。

近年、国内では、６割程度を中国からの輸入に依存する原料の薬草が「第２のレアアース（希土類）になりかねない」との不安が高まっています。レアアースと同様、中国当局が輸出制限に乗り出しているからです。経済成長で医療保険の適用対象が拡大した結果、中国国内の漢方薬需要が急増していることに加え、昨今の健康志向も相まって日本国内においても漢方薬市場が急拡大している事情もあります。こうした背景から、国内漢方薬メーカー最大手の株式会社ツムラは、昨年秋、夕張市に大規模な栽培加工拠点を設立しました。長期的には中国に代わる生産拠点として北海道を位置づけていることの表れです。このツムラさんの北海道における薬用植物の栽培研究にも、当然名寄の「薬草試験場」は大きく関わっています。

昨年１１月３日、当研究部の研究リーダーであった柴田敏郎さんは、名寄市文化奨励賞を受賞されました。これまで、通算１４年の長きにわたり名寄にご勤務いただき、北方薬用植物の栽培・定着・改良にご尽力され、北海道の薬草栽培振興に大きな力を発揮されました。柴田さんの代表作「北のハト」は、今まで南方でしか栽培できなかったハト麦の北方向け品種です。健康面や美容面での効能はもちろん、低農薬で栽培できることから、健康食品としてはもちろん、高級菓子や高級化粧品メーカーからの問い合わせも多く、生産も軌道に乗りつつあります。この「北のハト」をさらに無農薬栽培しようという取り組みが、国産生薬㈱、微生物応用技術研究所、北陽紙工㈱の市内３社で始まるというお話も聞いています。歴代の職員の皆さまが築いていただいたこうした薬用植物の栽培ノウハウの蓄積を生かし、今一度、名寄市において、将来性のある薬用植物の生産が、畑作物の輪作体系の一環として再び盛んになることを大いに期待しています。

この春、柴田さんは定年退職を迎え、地元筑波市に戻られましたが、名寄市のことはこれからも応援していただく確約をいただいています。後をしっかり引き継ぐ菱田サブリーダーをはじめ職員の皆さまも情熱溢れる人たちばかりです。６月２５日には、より多くの皆さまに薬草の魅力を発信する機会として、また、より市民に親しまれる研究部を目指して「（仮称）薬草花まつり」なるイベントを企画していただいております。「薬草試験場」の薬草群は、６月末から７月にかけ、本当に見事な花を咲かせます。この機会に是非一度足をお運びいただきますようお願いいたします。

※この企画のAirてっしでの放送時間は毎月1日と10日の午前と午後の予定。土・日のときは、その翌日の放送となります。

「名寄市からのお知らせ」を放送中
市からのお知らせやイベント情報などを紹介しています。
放送＝毎週月～金曜日 ❶ 8:10から ❷ 12:30から ❸ 17:10から